

学 位 論 文 要 旨

氏 名 前原 裕樹

題 目 バフチンの対話理論による教育実践解釈および教育実践開発に関する研究

I 研究の目的と方法

1 研究の目的

本論文は、バフチンの対話理論をその理論的背景とし、教育実践の分析と解釈、および実践の開発を目的とする。具体的な研究課題は以下の4つである。第1に授業における対話性、とりわけ材に内包される対話性を明らかにすること、第2に学級における児童の対話の変容過程について明らかにすること、第3に学級における授業の対話の変容について明らかにすること、第4に教室、および「方法」に内在する権威・権力構造に関する事例シナリオの開発、および実践を検証すること、である。

2 研究の方法

本研究では、教育実践解釈に関する方法として①授業観察、②教師へのインタビュー、③材の分析、④T-C記録の分析、実践開発に関する方法として⑤対話シナリオの検討、⑥学生のワークシート分析を行った。

II 研究の概要

第1の課題に関しては、教師がいかにして児童と対象世界を出会わせているのか、また児童はどのように対象世界と対話しているのか、について明らかにした。そのための方法として、教師へのインタビュー、授業記録、および参与観察データを収集し、これらのデータを総合的に分析した。その結果、①「クロツグミ」は、「児童の手によって、様々な問を立てることが可能な材」であり、そのことが材との対話の入り口となること、②「クロツグミ」の解釈は多様ではあるが、文の中にある根拠をもとに、ある1つの読みの解釈を提示することが可能な材であること、③「クロツグミ」の実践には、これから始まる「絶え間なき」意味交渉過程としての対話の基点となるという意味、および対立する者同士の対話だけではなく、材との対話（コミットメント）を促す材であることが明らかになった。以上のことから、「クロツグミ」を間においた教師と児童の対話によって、後の「変容」への契機となる対話が構築されている、との解釈に至った。

第2の課題に関しては、授業における学級における児童の対話の変容過程について明らかにするため、まず、児童1名を抽出し、他者の言葉への応答のプロセスを明らかにした。その結果、以下のことが明らかになった。すなわち、抽出児の「応答」は、授業に参加し、児童自らが授業を進行できるための「応答」を基点とし、発言者に対する言語的・非言語的なコミットメントによって「発言への当事者意識」を持ち、「安心して発言できる場」の構築をもたらすような「応答」を経て、他の児童を意味交渉に導く他者としての「応答」という変容プロセスをたどる、ということである。そのプロセスを踏まえ、次に、児童の対話スタイルの特徴について明らかにするため、児童2名を抽出し、2名の対話スタイルを比較検討した。その結果、以下のことが明らかになった。すなわち、児童の一人は、①他者の発言に対し応答し、②他の児童の発言をきっかけとし、新しい疑問や問題の発見し、③学級の児童を意味交渉の場へ導いていく、ということが明らかになった。また、別の児童は①特定の児童との対話、②教師との1対1の対話、③他の児童による応答により、児童の発言の宛名が他の児童へと広がっている、という対話スタイルが明らかになった。このことから、異なった対話スタイルをもつ児童が教室に存在するということが、「多声的な教室空間」を構築している、との仮説を生成するに至った。

第3の課題に関しては、国語科授業を対象に、4月と11月の授業を比較・検討した。その結果、3つのことが明らかになった。1つ目は、4月の授業では、発話に前の発話を受ける「接続詞」が用いられておらず、また発話の根拠として本文を取り上げる児童の姿がみられないのに対し、11月の授業では、前の発話を受ける「接続詞」が含まれるようになってきていることである。2つ目は、4月の授業では、児童の発話に対して、意味交渉過程へ導く「つつこみ役」を教師である林教諭が担っているのに対し、11月の授業では児童の発話に対して、意味交渉過程へ導く「つつこみ役」を児童が担っていることである。3つ目は、4月の授業では、「宛名」が観察者からは特定できない発話に対して、その発話を児童がひろうことがなかったのに対し、11月の授業では観察者からは「宛名」が特定できない発話を児童がひろうことができるようになってきていることである。

以上より、児童の発話の「宛名」が教師から児童へ変容することで、児童の発話が、教師の「権威の言葉」とは異なり、児童の内的対話をもたらし言葉となる。そして、対象である材を間に置き、対象について自分の言葉と他者の言葉を突き合わせ、互いに変容することにより、そのような過程の中で理解を深めたり、考えや解釈が変化したりしていく、と解釈できる。

第4の課題に関しては、教室における権威・権力構造の理解を促す事例シナリオを開発し、実践を試みた。事例を提示、ワークシートの記入、およびグループワークの講義を行った後、学生の学びの記述分析を行った。その結果、次のことが明らかになった。第1に、本事例を通して、学生は、教師の人間性や教育方法が子どもを変えうる可能性、およびそれらのもつあやうさを自覚するに至ったことである。第2に、本事例から、学生は教室における子どもの主体の重要性を認識できることである。しかしながら、学生の中には、本事例における実践を教師の人間性や道徳性の欠如、といったその教師個人の特有の問題に起因してしまうような表面的な解釈にとどまっている学生も数名いた。これは、教員側の事例の説明不足やガイディングクエスションの拙さもその要因であると考えられる。よって、講義の展開やガイディングクエスションの工夫が必要であろう。

Ⅲ 研究の成果と課題

本研究の成果は、バフチンの鍵概念の整理、および実践解釈の可能性を明らかにできたこと、およびそれによって児童の学びを照射できたことである。また、教室における権威・権力構造の理解を学生に促し、教室における対話の意義を認識できる事例の開発ができたことである。

今後の課題は、以下の3つである。第1に、バフチンの対話理論における鍵概念のさらなる検討である。第2に、対話理論の言語領域以外の拡張の可能性についてである。第3に、対話に関する諸問題にかかる事例シナリオの作成と蓄積である。